

八方無事

近世から近代に至るまで、日本の名医の筆頭に挙げられたのは長田徳本であった。戦前の娯楽雑誌に、次のような逸話が載っている。

姑との確執に疲れ切った嫁が、徳本に姑を殺す薬を調査して欲しい、さもなければ自害すると迫った。徳本は拒否したか、それともなだめたか？ いや彼は、毒薬と称して粉薬を与えたのである。嫁は喜んで姑の食事に毎日その粉末を混入する。しかし日が経つにつれ、姑は嫁の優しさにすっかり打ち解けて、近所でも評判の嫁姑の仲になった。こうなるといたたまれなくなった嫁は、再び徳本を訪ね、「私は何と罪深い女でしょう。あの仏様のようなお姑様を殺そうなんて。先生、どうかお母様をお助けください」と涙ながらに訴えた。徳本は笑って、「心配はいらぬ。そなたに渡したのは砂糖じゃ」と答えたという。

こんな難問は逃げるに限るが、徳本はしっかりと受け止めている。それでは徳本は嘘をついたかといえ、そうで

もない。砂糖でも取り過ぎれば毒ともなる。徳本の禪的素養から発せられた頓知であった。

生か死か、○○か脱○○かなど、世の中には二者択一を迫られることがある。相反する二つの対立物が、その対立をそのまま残した状態で同一化することを、西田哲学では絶対矛盾的自己同一という。片方から目をそらすのではない。止揚することで乗り越えるのである。日本の庶民はその辺のことをよく心得ている。生死一如だとか、本地垂迹説（神道側からは神本仏迹説）、あるいは、八方無事に収める知恵とか、近江商人の三方良しの心得などである。新しい政府も前途多難であろうが、日本的知恵で乗り越えていくて欲しいと思う。

ところで徳本の姓は「長田」か「永田」か。これは絶対矛盾ではなく、漢字以前に戻ればいいだけなので、好きな方を選べばよいと思っている。私は『日本古医学の祖 長田徳本』など徳本の考察でも有名な安西安周氏や、『為方掎矩』（この書には長田徳本とある）を著した幕末の隠医・平野革谿を信頼しているので、「長田」を採用しているに過ぎない。

今年、長田徳本は生誕500年を迎える。